パラレル・ドライブ

此処には異なる秩序が幾つも潜んでいる。柱、窓、 胴縁、パネル、扉、屋根、壁、それらを規定する秩 序はそれぞれ独立し存在している。建築によって叶 えたい複数の事象にパラレルに向き合う。そうする ことで生まれた秩序は設計が進むごとに、重なった り、相反したりする。建築設計におけるあらゆる矛 盾や意味の重なりを受容し、建築が本来の意味を越 えて<mark>多解釈的</mark>になるようにする。例えば、柱はその 合理性から、全体を 3 等分 するように配置されるが、 窓はそれとは独立して 1000mm 角を基準に壁面を 5 等分する。そして天井クレーンは<mark>揚程</mark>により定め られる。それぞれが独立して立ち上がると、窓から 柱が見切れ<mark>たり、</mark>クレーンが窓を横切ったりする。 これらの矛盾はさらなる解釈を生み、建築がそれ以 上の価値を持ち始める。一方で、等間隔に配置され た胴縁は窓のフレームの間隔と丁度重なり、合理性 を強めている。如何にせよ、パラレルな秩序を衝突 させることは、新たな意味を生み出したり、その意 味を強めたりする。1+1は3または強力な1となる。

スピードに耐える表徴力

遠景、あるいは車窓からの一瞥においてのみこの建築は社会と接続する。その刹那的な知覚の中で建築が見過ごされぬよう、建築の表徴としての強度を高める必要がある。倉庫というニュートラルな形式に対して、家よりもスケールの大きい家型と、ファサードに穿たれた窓・パネル群、窓を横切る主柱とクレーン、マッシブな庇、シンメトリーに配置された雨樋が遅和を生じさせる。日中、それぞれのオブジェクトは壁面にリズミカルな影を落とし、夜間、光が灯ると半透明のポリカーボネートを通して巨大な光の格子へと変貌する。それは、車窓からの一瞥に耐え、見る者の記憶に断片を刻み込むための、表徴である。



形式、記号、連想

バイロケーションズ ーマルチ・エイリアスの所在、一身二ヶ所存在一

厳しい与条件に応答するため、建築はその最も基本的な型へと還元された。この倉庫というタイプに内在するグリッドや反復といった秩序を拡大解釈し、建築の主要な断片のひとつとした。

建築の主要な断片のひとつとした。
ファサードに穿たれた正方形基準の窓群、マッシブな庇の三角形、鈍く銀に光る家型は、それ自体が純粋な幾何学であると同時に、この場所固有のアナロでもある。それは内部に整然と積まれる凍結防止剤のパレットの積層であり、独特な形態をした散布機のシルエットであり、天井クレーンが機械的にグリッドを移動する軌跡の投影でもある。また、家や、木々や、月のような、日常に潜む記号でもある。
機能と幾何学が類推の関係で結ばれることで、建築

機能と幾何学が類推の関係で結ばれることで、建築 は単なる箱であることをやめ、 形式は強度を帯びる。

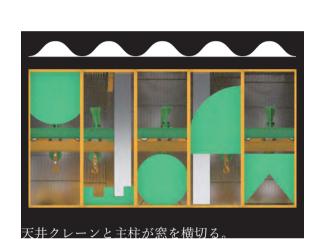


クレーン、あるいは表象の装置

クレーンが窓の前を横切る時、その機械的なシルエットは窓の幾何学と重なり、新たなイメージの断片を 生み出し続ける。この装置は、通り過ぎゆく人々の 記憶を喚起し、常に移ろう風景の断片であり続ける。

プランズ・システム

建物を敷地北西の道路側に寄せることで 全距離を確保し、散布車が最低限の切り返しで駐車 できるよう、シャッター前に 最大限のクリアランス を設けている。また駐車エリア、散布機エリア、散 布剤エリアを明確に区分し、動線の最適化を図る。



ニュートラルな架構

経済的、合理的観点から、短手方向に強固なラーメン構造、長手方向にブレース構造を採用した。幅 11.5m の無柱空間を実現するため、短手方向に柱梁を剛接合した強固な山型ラーメン架構を 5m ピッチで配置。ブレースは壁・屋根共に中央スパンに集中配置し、建物全体の剛性を確保する効率的なコアを形成。2t クレーンの荷重は、主柱から持ち出した H 形鋼のコーベルで支持。主架構に SN400B 材を選定し、高い耐震性を確保する。

架構は C形鋼の母屋・胴縁によって一体的に連結され、屋根・壁の荷重を効率よく主柱に伝達。窓の補強枠はその水平材を胴縁と兼用することで部材数を削減。幅7mのシャッター開口部は、角形鋼管の方立とH形鋼のまぐさによる補強フレームを設け主構造に影響を与えることなく成立させる。また、敷地境界条件の圧迫を回避するため、独立基礎を偏心基礎とし地中梁で連結。建築面積の増加を抑制している。最小限の部材で成立する明快な構造計画とした。

$\bigcirc + \triangle + \square = CROWN$

幾何学はその象徴力により、様々なイメージと結びつく。ファサードを構成する幾何学的なパネル群は、記憶の中のイメージへの参照であり、都市に遍在する無数の建築の断片でもある。それは過去のイメージが星座のようにきらめく瞬間の現出を意図している。そして、それらの幾何学は、黄金比、グリッド、シンメトリー、拡大、切断、円弧、鈍角、鋭角、それぞれ異なる秩序によって独立している。できる限り多くの集合に重なるように合成された幾何学はイメージを積極的に想起させる。それは表象する幾何学であり、建築のかたちにだって、王冠にだって、文字にだってなってくれる。

